

藻谷浩介、NHK 広島取材班著「里山資本主義—日本経済は『安心の原理』で動く—」角川角川 one
テーマ 21 C:249 角川書店 2013 年 7 月 10 日刊を読む

第 5 章「マッチョな 20 世紀」から「しなやかな 21 世紀」へ—課題先進国を救う里山モデル—

(NHK 広島取材班・井上恭介)

1. 報道ディレクターとして見た日本の 20 年

(1) 藻谷浩介さんとタッグを組み、片田舎と馬鹿にされてきた地方から発信される 21 世紀の最先端を「里山資本主義」と名付け、その意義を世に問い続けて 1 年あまり。水と油のような両極端の反応に、驚いている。

(2) 「水」のように受け入れてくれるのは、①無名の人の^{すてき}素敵な生き方、今の生活を少しでも前進させる知恵に素直に反応し、取り入れる気質を持つ人々だ。こういう人は田舎に U ターン、I ターンしても、単に地元企業で「職」を探すのではなく、②お金うんぬんではない豊かさを見つけ出す嗅^{きゆうかく}覚にすぐれている。

(3) そうした志向の人は加速度的に増えており、都会から地方への流れができています。

(4) 鳥取県では、行政も把握しない形で地域に入り込み(もともとは、県の I ターン募集のホームページが情報源だったりするそうだが)、地域社会に密かに溶け込んでいる若者も多い。「どうしてきたのか」と尋ねると「働きたくないから」と答える天邪鬼^{ひそ}。性格も見た目も「なで肩」で、無気力そうに見えるが、試しに人手が足りない地域の祭りを仕切らせたりすると、意外なほど粘り強く、最後まで責任を果たす。だから地域のおじさんたちの間でも、子どもたちの間でも大人気。やれ田んぼの草刈りをすると行っては助っ人^{すけ と}に呼ばれ、1 年中食べたい分だけ米をやると言われ、やれ土産物屋で手作りのストラップを作るといっては誘われ、夜中まで楽しく作業し、夕飯で余った食材をごっそりもらって帰って行く。

(5) そんな若者を見て、ある程度から上の世代が思い出すのは、①昔、祭りや地域の行事になると、決まって人々の輪の中心に陣取り、大活躍していた次男坊、三男坊の「気のいいおにいちゃん」たち。しかし戦後、そうした若者が高度経済成長を担う「金の卵」ともてはやされる中、②「気のいいおにいちゃん」は次第に田舎から姿を消した。少し前までは、彼らが都会で夢破れたと帰ってきて、厳格な跡取りの長男に迎えられて養われる、といったこともあった。しかしその後、迎えていた長男までも都会に就職する時代となり、③ふるさとの「迎え入れて養う力」は急激に落ち、そういう人もめっきりいなくなった。

(6) 私たち報道ディレクターがこの20年あまり取材してきたのは、そうした事態の進行の「裏表」を映す、様々な現象だったといえる。

(7) 今でも強烈な思い出が残る取材がある。バブル崩壊後の1990年代、都心の電車の中で行き倒れて死亡したホームレスの男性が半日も座席に放置されていた、といういまわしい出来事が起きた。

①なぜ彼は電車の中で死ぬしかなかったのか？②同じような人がいるのか？遺品の中にあった池袋駅いけぶくろ発行の切符と喫茶店のマッチを手がかりに、池袋駅周辺のホームレスを約1ヶ月取材した。

(8) 景気の良いときはいくらでもあった①建設現場の仕事が激減。「どや」に泊まるお金もなくなり、電車が動いている間は②駅の地下通路で、終電が終わり駅のシャッターがしまると、③駅周辺の飲食街の軒下で暮らしていた。体が思うように動かない人も多く、比較的元気な数人が、工事現場の日雇いの仕事でもらってきたお金で④パンやカップ酒を買い、分けあっていた。

(9) そのような中でも、数回はふるさとに帰ったことがあると話してくれたホームレスもいた。でも実家の敷居はまたがず、戻ってきたという。①家にはもう帰れないとつぶやいていた、みつぐと名乗る男性。その時は「どの面下げて…」という意味だと受け取ったが、②ふるさとの事情が大きく変わったことも、関係していたのかもしれない。

(10) 「故郷に帰るに帰れないホームレス」が都会の駅や公園、あるいは24時間営業のファストフード店に増える一方で、①ふるさとは空き家だらけになるという奇怪な事態。②都会での脱落者はどんどん増え、日本は③「無縁社会」なる言葉が流行語となる時代へ突入していった。

2. 「都会の団地」と「里山」は相似形をしている

(1) ①企業で比較的クリエイティブな仕事をしてきたリタイア組。その中でも、②元気でがんばれる75歳までの15年の間に思い切って何かに打ち込みたいと考える人の多くが、里山資本主義を「水」のように受け入れてくれる。

(2) 庄原しょうばらの和田芳治よしはるさんは、こうした人たちを「高齢者」をもじって「光齡者」と呼ぶ。①地方にとって頼りになる「光り輝く人材」という意味だ。②「だいたい世の中というものは、たくさんあって余っているものを使うとうまくいくんです」と、和田さんらしい辛辣しんらつな表現で解説してくれる。

(3) 確かに今、こうした①リタイア組の中に、「第二の人生は田舎で悠々自適」という選択をする人が相次いでいる。②畑仕事は素人だが、知らないことでも一から学び自分のものにする訓練は、働いていた企業などで繰り返してきた。③知らない人につきあう訓練も十分積んでいる。

(4)さらに和田さんたちが重視するのは、将来はともかく現在はまだ、リタイア組は多少のリスクを取れる「年金というセーフティーネット」を持ち合わせているということだ。②「年金プラスアルファ」の「アルファ」だけ手に入れられれば、生活はぐっと豊かになる。現金の形で手に入れなければならないわけでもない。③若い世代に比べ、ハードルがぐっと低いのだ。④リタイアしたら田舎へという潮流を今のうちに作っておけば、地方活性化の人材は安定的に供給できていく。和田さんたちは、働きかけを急いでいる。

(5)田舎に農村に第二の人生をかける人に、必要以上に「自然好き」「田舎好き」のレッテルを貼る向きもあるが、やめるべきだと和田さんたちは指摘する。世界一の物質的な豊かさを手に入れた成熟社会の経験者が「薪^{まき}のようにおいしく炊ける炊飯ジャー」に飽きたらずエコストーブに挑戦したり、「高級スーパーの有機無農薬野菜」に飽きたらず自分で作り始めたりするのは、そんなに不思議なことではない。

(6)もうひとつ、彼らが①渴望感を抱いているのがコミュニティだ。今、都会のあちこちで開かれる祭りに飛び入り参加するのを趣味にする人が多いのは、そのひとつの表れであろう。若いうちは、誰にも干渉されない都会のドライな人間関係にあこがれても、年齢を重ねて落ち着いてくると②過疎化しているとはいえ、昔ながらの人間関係が残る田舎は良いところに見えてくる。

(7)①高齢者ばかりになった都会の団地で、「亡くなっても誰も気づかず」という事態に危機感を抱き、コミュニティの再生に汗を流すリタイア組と、②地方に入り込んでがたがたになりつつある田舎のコミュニティを立て直そうと意気込む人たちは、③実はほとんど同じ志向を持つ人たちなのだ。

3.「里山資本主義への違和感」こそ「つくられた世論」

では、里山資本主義を毛嫌いし、成果を認めない、あるいは評価に値しないと門前払いする「油」のような人たちは、どのような人たちか。

かつての経済成長を取り戻すこと、あるいは競争の激しい新興国の成長市場での戦いに勝つことを日本再生の最優先課題に掲げる人たちだ。インドやアフリカに乗り込んでいく中国や韓国のバイタリティーあふれる若者に比べ、海外に行くのは嫌、温泉でのんびりしたいとか言っている日本の若者はなんだ、というのが、こうした論調が真っ先にあげる「嘆かわしい事態」だ。田舎がいいなどと言っている若者をほめる里山資本主義は、けしからんとなる。

自動車やエレクトロニクスに代わる日本の稼ぎ頭を見出し、海外勢と渡りあって勝たなければ日本のあすはない、という論調。では、当の最先端^{みいだ}を担う人たちは、本当に里山資本主義の精神を毛嫌いしているのだろうか。

私自身の1年あまりにわたる取材経験と見聞から、それこそ「作られた世論」ではないかと考えている。

4. 次世代産業の最先端と里山資本主義の志向は「驚くほど一致」している

(1) 私は、東日本大震災をはさんでおよそ 1 年間、20 以上の企業と一緒に「スマートシティ」のシステムをつくっていくプロジェクトの内部取材を許され、入り込んだ(広島に転勤してくる直前のことである)。週 1 回の会合のほとんどのに参加し、いわばプロジェクトの一員として議論にも積極的に加わった。

(2) 参加企業は、まさに日本経済のあすを担う企業ばかり。主だったメンバーは、発電から家電、列車の運行システムから製鉄所の設計まで手がける総合電機メーカー、日立製作所。省エネビル開発で世界の先頭に立つゼネコン、清水建設。経営不振に苦しんでいるとはいえ、太陽光パネルの技術は世界トップクラスを誇る家電メーカー、シャープ。世界的 IT 企業ヒューレット・パカード(HP)の日本法人。リチウムイオン電池やスマートグリッドなどの企業を世界中で発掘し情報を駆使してビジネスチャンスにしている総合商社、伊藤忠商事。中国はじめ新興国の不動産ビジネスへの展開を加速させる三井不動産。そうそうたる会社の切れ者、くせ者たちが顔をそろえる。そんなもさもさたちの会議を、世界各地、あるいは政界にも様々なネットワークを振り巡らせるコンサルティング会社の社長、佐々木経世氏が仕切っていく。

毎週 3 時間以上の時間を割き、会議にメンバーを送り込んでくることから、この分野で世界のトップを走れるかどうか、企業の「社運」を握っていることがわかる。数年後には数十兆から 100 兆円規模に膨らむと期待される世界市場で、どう主導権を握っていくか。会議で配られる資料には、どのページにも「極秘」の文字。個々の技術はもちろん秘密のものばかりだが、会議では中国・天津で進む巨額契約についての情報や、アメリカ・シリコンバレーでつかんだアメリカ当局の思惑に関する情報なども飛び交う。

前置きが長くなった。伝えたいのは、その議論の内容、つまり彼らが何を面白いと感じ、何をしていけば日本は世界の中で勝っていけると考えているか、ということだ。

(3) 先に結論をひとことで言えば、彼らが目指していたことは「企業版・里山資本主義」であり、「最先端技術版・里山資本主義」だった。

(4) 「スマートシティ」とは何か、まずそこから説明しなければならない。巨大発電所の生み出す膨大な量の電気を一方的に分配するという 20 世紀型のエネルギーシステムを転換し、町の中、あるいはすぐ近くで作り出す小口の電力を地域の中で効率的に消費し、自立する 21 世紀型の新システムを確立していく。それがスマートシティだ。

(5) 中東 UAE で建設が進む「マスタートールシティ」などがその代表格。広大な未来都市を表現する豪華な CG 映像から受ける印象は大規模でマッチョだが、②大事なのは中身の繊細さであり、③どこまでしなやかに様々な状況に対応できるかを、提案者である企業連合が競うことになる。

5. 里山資本主義が競争力をより強化する

(1) 使う電力として重視するのは、身近に設置できる太陽光パネルや風力発電機で作った小口の電気だ。そうするとまた、「そんなもので日本のエネルギーが代替できるのか」と、反論を受けそうだ。

(2) 確かに、里山の革命家たちは、その反論に正面から異を唱えなかった。「日本全体のことはともかく、田舎で使うエネルギーの大きさを考えれば」と、ある種の逃げをうった。しかし、スマートシティの猛者たちは、反論が寄って立つ前提に異を唱える。「そんなことを言っていると日本は遅れをとってしまう。できるわけがないと言っていると世界で負けてしまう。それができるようオールジャパンの英知を結集させる時なのだ」

何を根拠にそんなことをいうのか。

(3) 日本企業は、一般の常識では想像もつかないレベルの省エネ技術を獲得しつつあるのだと、清水建設の技術者は胸を張る。「我が社の新本社ビルは、従来のビルが消費するエネルギーの 50% を、減らすことに成功した」

だが、反論はまだまだ出てくる。でも、その反論を押し戻す答えはすでにある。

「電力消費のピークに、キャパシティー(許容量)を超えたらどうするのか」

「そうなった時、各家庭の冷蔵庫や洗濯機やエアコンの電気使用状況を調べ、今すぐにはいらな
いものから、手を突っ込んで(実際にはコンピューター制御によって)スイッチを切っていくシステムを開発し、改良を重ねている。これこそが今、アメリカの GE やドイツのシーメンスといった世界企業と日本勢がしのぎを削るスマートグリッドという技術なのだ」

「太陽光とか風力だと、自然の変化で電気が安定しないから、使えないと電力会社などが言うのを聞いたことがあるが」

(4) 「発電量の変動に対応し安定させる技術こそ、今日本が世界の先頭を走っている得意の技術だ。

そこを強みに、我々は世界の受注競争を勝ち抜いていこうとしているのだ。②日本の電力制御技術は世界一といってよい。震災のあと、計画停電で世の中の大混乱を引き起こしたのは、日本に技術がないからではなく、電力会社がいざというときの技術の使い方を学んでいなかったからだ」

巷間こうかん言われている、「再生可能エネルギーなんてうさんくさい」という「ある種の正論」が、いかに日本経済の次代の競争力強化にとってマイナスか、わかってくるだろう。日本経済や財界のためなどといっているが、とんでもない。

お隣の韓国では、済州島チェジュドという大きな島全体を実験場にして、ライバルに勝とうと国中が一丸となって頑張っている。そうした動きに、塩を送ってどうするのだろうか。

6. 日本企業の強みはもともと「しなやかさ」と「きめ細かさ」

最後にもうひとつ、重要な反論に答えておきたい。

「でも結局、日本中が使う大きなエネルギーは、原発や火力発電所で大量に作った方が効率的なのではないか。いくら電気を使っても大丈夫というのでないと、工場でいいものは作れない。化石燃料は枯渇するなどと脅かされてきたが、シェールガスとかシェールオイルが安く掘れるようになって、まだまだ大丈夫だというのだし」

- (1) 「確かに発電にまつわる産業は日本にとって重要で、中でも発電用タービンの技術では、世界と戦っていかなければならない。しかしそのことと、日本がエネルギー浪費社会にあぐらをかいていていいという話は、全く別だ。①我々が今まで何を強みに世界と戦ってきたか。それは、省エネだ。②そしてそれを成し遂げたのは勤勉な日本人のしなやかさ、きめ細かさなのだ。③日本人の強みをこれからもっと特化し、のばしていかなければ、世界には勝てない」

毎週毎週スマートシティ企業連合の会議で、各社選りすぐりの知恵者たちが研ぎ澄ましていたことは、これに尽きるのだ。

- (2) 日本は、アメリカが牽引した20世紀にあっても、実は「アメリカ型のマッチョな資本主義」とは一線を画す姿勢で戦いに打ち勝ってきた。

- (3) 自動車を見れば、それは一目瞭然だ。トヨタのお膝もとにある世界の自動車を集めた博物館に行くと、①GMやフォードの往年の名車もずらりと並んでいるが、②改めて驚くのはその「馬鹿でかさ」だ。1960年代あたりのハリウッド映画で銀幕のスターが乗り回していた、羽のついたようなデザインの豪華なスポーツカー。ガソリンをガブガブ飲み込み、排気ガスと二酸化炭素をバンバン出しながら走っていた。これこそが、アメリカが世界に先駆けて達成し、世界中があこがれ、その後を追った「マッチョな資本主義の豊かさの象徴」たる自動車なのだ。そのようなアメ車でハイウェイをぶっとばしてショッピングモールに繰り出し、見渡す限り商品が積まれたスーパーで買い物をし、バケツみたいに大きなアリスクリームをかかえて食べながら帰る「マッチョな豊かさ」。

- (4) それに比べ、日本車のななとこぢんまりしたことか。日本は、ただ小さいだけでなく、使用するガソリンを極限まで抑え、有害物質を極限まで出さない車を開発していくことで、王者の足元を脅かしていく。

- (5) アメリカが目指したものと一線を画したのは、完成品としての「製品」だけではない。「作り方」でも、しなやかさ、繊細さを発揮し、世界をリードしてきた。

7. (1) エズラ・F・ヴォーゲル博士の『ジャパン アズ ナンバーワン』(1979年)がアメリカ人に危機感を抱かせ、日本人を勇気づけた 1980 年代、この日本式の生産システムを本家のアメリカが学ぶ時代が訪れる。私は②90年代に入ってすぐ、いち早くアメリカに生産拠点を置き「日本式の伝道師」となったホンダで取材をさせてもらったことがある。③ホンダの系列に入ったアメリカの部品工場に熟練の技術者が入り込み、きめ細かな車作りを文字通り手取り足取り教えていた。④作業を0点数秒短縮できる工具や部品の配置を、アメリカ人の工員を巻き込んで工夫していた。⑤アメリカ人たちは、根気良くカイゼンを続けるその姿勢に感嘆していた。
- (2) 技術者のきめ細かな姿勢は、そのまま製品に映されていく。たいそうな発明でなく、ちょっとしたさじかげんで飛躍的に性能をアップさせていくその技は、多くの「メイドインジャパン」に共通するお家芸だ。
- (3) スマートシティは、まさにそうした「ニッポンものづくりの遺伝子」を受け継いだ人たちが、自分たちの強みを極限まで発揮しようとする場である。②作り出した電力の数十%を無駄に捨ててしまうしかない現状のシステムは、21世紀の人間のすべきことではないと考え、必要な分だけを作り、作ったら全部使い切ろうとする。
- (4) ①ビルは外光をできるだけ取り込み、使わないライトはその都度コンピューターが感知して消し、クーラーのききすぎた部屋のエアコンは切る、②夏の昼間、どうしても電気が足りないときは、「その洗濯、夜中にしてもらえませんか。その分電気料金を安くしますから」と持ちかけ(洗濯機にそういう洗濯の機能をつける実験が進められている)。
- (5) 余ったら蓄電する。高性能のリチウムイオン電池なら、そんなにスペースもとらない。「もったいない」は安心のもとでもある。水道が断水しても困らない貯めおきの水があるようなものだ。家の駐車場にある電気自動車に積むリチウムイオン電池も、貯めおきのバケツがわりになる。多くの家庭の車が1日のうちに使われているのは、通勤と買い物と子どもの塾の送り迎えの時くらいで、あとは駐車場にとめられている。昼間、屋根につけた太陽電池がせっせと発電し、その電気を電気自動車に貯めておけば、家庭の夜の電気くらいは十分まかなえるようになるはずだ。清水建設のいう、今の半分のエネルギーで済む建物の技術をさらに洗練させ、街中に広げていけば。
- (6) ①これなら、東日本の多くの人が体験した、あの計画停電の悪夢は見なくてすむ。さらに、②地球にやさしい暮らしをしていることは、とても気分が良い。③誇らしい気持ちになる。
- (7) それこそ、里山資本主義を実践する人たちが感じている、誇らしい気持ちと同じものだ。

8. スマートシティが目指す「コミュニティー復活」

- (1) 驚くなかれ、「スマートシティの精神」の里山資本主義との符号は、まだ終わらない。
- (2) スマートシティのシステムを導入するマンションは、エネルギーの効率的なシステムと共に、住民のつながり、みまもりを復活させるシステムを併せ持つことを目指しているのだ。どういうことか。
- (3) コンピューターのシステムが各家庭の消費電力を把握し、コントロールするということは、住民がどう暮らしているかという情報を管理している、ということでもある。こうした個人情報が出漏れしないようにすることにも大きな努力と技術革新がこまれている。そうした情報に加工を施した上で、使えるものは使っていこうというわけである。
- (4) 全部の部屋の電気が消えたら家族は寝たのだなとわかる。テレビもエアコンも切られ、セキュリティを外から確認できるスイッチが入れられたら、外出するのだなとわかる。ひとり暮らしのお年寄りが倒れていないかは、トイレの使用や、お茶を飲むために使うポットの使用をチェックしておけば把握できる(すでにそうしたことは、離れて暮らす家族のためのサービスとして始まっている)。ばらばらで、同じ建物に住んでいてもつながりが薄いマンション。そのつながりを取り戻すためにこのシステムを活用できないか、都会の孤独を解消できないかというのだ。
- (5) 毎週の会議で、メンバーたちが一番目を輝かせて議論し、アイデアを出し合っていたもののひとつが、この「ITによるコミュニティー強化」だった。会合後の飲み会は、さらにこの話で盛り上がる。
- (6) 実際にスマートシティのシステムを導入しようとするマンションの住民との会合でも、関心が集まるのは、ここだ。ただ便利だけではない技術、人をきめ細かにいたわる技術であることが、住民たちの共感を集めていく。
- (7) ビジネスや技術の最先端を切り拓^{ひら}こうとする日本人の多くは、ただ儲^{もう}けたいのではない。むしろ、①儲け以上に「理想」が大事なのだ。②自分の目指す「人として、地域として、国としての生き方」を実現するためのビジネスや技術でありたいのだ。
- (8) ①その思いは東日本大震災後、さらに高まっている。会議で熱い議論をしていたその最中に大震災の異様な揺れを経験したメンバーたち、②震災後のニッポンに自分たちが開発してきたことを役立てなければならない、といち早く声を上げ、被災地復興にスマートシティのノウハウをつぎこんでいくアイデアを出し、動き出している。
- 海外でも、企業軍団を仕切る佐々木氏は、ロシア・サンクトペテルブルクでの巨額受注に向け、動きを加速させている。

私が広島に転勤し、里山資本主義の「運動」を始めたあと、久しぶりに出張した東京で主要メンバーのひとりと夕食を共にした。彼は、席につくなり興奮気味に自分の構想を話し始めた。

(9)①「昔、ご近所でしょうゆを貸し借りしたり、荷物を預かったり、安否を気遣ったりしたのと同じことが、マンションライフでも提案できないか、考えているんです」と。②没交渉になりがちなマンションの人間関係をつなぎ直し、温かみを感じるコミュニティにしたい。その理想を、彼は真正面からつきつめようとしていた。

私も、中国山地の元気なおじさんたちと取り組んでいる挑戦について話した。互いの話は刺激し合い、クロスして膨らんでいった。

「なんだ、完全に一緒じゃないか！」と爆笑した。我々は固く握手を交わし、これからも情報を交換し、刺激しあおうと約束した。

9. 「都会のスマートシティ」と「地方の里山資本主義」が「車の両輪」になる

(1) これからの日本に必要なのは、この両方ではないだろうか。①都会の活気と喧噪けんそうの中で、都会らしい21世紀型のしなやかな文明を開拓し、ビジネスにもつなげて、世界と戦おうという道。②鳥がさえずる地方の穏やかな環境で、お年寄りや子どもにやさしいもうひとつの文明の形をつくりあげて、都会を下支えする後背地を保っていく道。

(2)①思えば戦後の日本、あるいは産業革命以降の先進国は、地方を切り刻んで都会につぎ込みすぎた。こんな小さな島国が、世界2位の経済大国に成長できたのは誰のおかげであったか、思いを致すべきだ。「金の卵」たちのおかげなのだ。多くの人材が、豊かで穏やかな農村から輩出されたことを忘れてはならない。②良い意味での揺り返しを促し、本来のバランスを取り戻すべきだ。③ただ昔に戻るのではなく、21世紀の最先端を体現した車の両輪で。

(3)①人口減少の問題も、無縁社会の問題も。②エネルギーや食が自給できない問題も、③さらには次の国際競争を担う産業が生み出せない問題も。④現代日本がかかえる様々な問題を、この車の両輪が解決していくのではないだろうか。

(4)①21世紀の人類が掲げるもうひとつのキーワードは「多様性」だ。②多様であることこそ豊かさなのだ。③それは「もの」にもいえるし、「ひと」にもいえる。

(5)大量に安く良いものが手に入るのが当たり前の時代。その時代を経た先に、個性が価値になる時代がやってくる。いうなれば、世界中の人が安くて温かいユニクロのシャツを着られる時代に、田舎のおばあちゃんの手編みのセーターがもてはやされる時代だ。

(6)人に当てはめれば、こういうことになる。①みんながみんな世界と戦う戦士を目指さなくてもよい。そういう人も必要だし、日本を背負う精鋭は「優秀な勇者」でなければならない。しかし、②その一方で地域のつながりに汗を流す人、人間と自然が力を合わせて作り上げた里山を守る人のいていいし、いなければならない。③そうした環境の中でこそ、人は増えていくのであり、次の世代の勇者がまたそこから育っていくのである。

(7)そうして日本というシステム全体が、持続可能なものとなっていくのだ。

P.232 ～ 250

[コメント]

ベストセラーとなった藻谷浩介さんと NHK 広島取材班著の「里山資本主義」。はじめは異端と思われていた藻谷さんの考えが少数派となり、今や多くの人々に支持される多数派となってきた。強靱性と包括性を併せ持つ持続可能な日本や世界をつくり出す上で必要不可欠な考えになってきた。大いに学び、少しずつでも実行に移したい。

— 2014 年 11 月 15 日 林 明夫記 —